

2022年7月24日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

申命記 21 : 22～23

ルカによる福音書 23 : 50～56

「死にて葬られ、陰府にくだり」

<墓>

先週は、イエスさまが十字架でとうとう死なれた場面の御言葉を聞きました。

イエスさまは、神の御子であり、神に遣わされた救い主です。このお方は、わたしたちの罪を身代わりになって担うために、この世に来られました。

わたしたち人間は、神さまに背き、その御心に従わず、神さまを怒らせ、その罪の裁きを受けるべき者でした。しかし、神さまはわたしたちを憐れんで下さいました。わたしたちが生きることを望んで下さいました。ですから、わたしたちが罪の裁きを受けて滅びないように、わたしたちが受けるべき罪の裁きを、ご自分の愛する御子イエスさまに、すべて負わせられたのです。

イエスさまは、その神さまの御心に従って、わたしたち罪人のために十字架にかけられました。そして、多くの苦しみを受け、耐え難い痛みと辱めを受けて、大きな叫び声をあげつつ死なれたのです。そうして、救いの御業を成し遂げられました。

今日は、この十字架で死なれたイエスさまを、お墓に葬る場面です。

わたしたちもまた、人生の中で度々、人の死と、葬りの場面に立ち会います。お墓は、葬りの業の最後の場所です。死者のために用意された場所です。誰しものが、いつかは必ず死に、お墓に葬られる日が来るでしょう。

わたしたちはお墓の前で、もはや生きていない故人を思います。悲しみ、寂しさ、虚しさ、後悔、嘆き。そして、わたしたちに対して圧倒的な力を振るう、死の力を思います。

イエスさまもまた、人とまったく同じように、死んで、お墓に葬られました。

その様子がどのようなものだったのか、今日の御言葉を見てみましょう。

<アリマタヤのヨセフ>

イエスさまの葬りをしたのは、これまで共に歩んできたイエスさまの弟子たちではありませんでした。今日はじめて登場する人物です。50～51節には、こうあります。「さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、同僚の決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである」。

よく、アリマタヤのヨセフ、と言われます。まず、彼は議員でした。つまりヨセフは、イエスさまを裁判にかけて死刑に定め、ローマの総督ピラトに訴えた、ユダヤ人の最高法院のメンバーだったのです。

しかし、彼は「善良な正しい人」であった、とあります。正しい人とは、神さまとの関係を重んじる人、ということです。そして、「神の国を待ち望んでいた」。彼は、おそらくイエスさまが告げておられた、神の国、神のご支配を信じ、イエスさまが神さまから遣わされた方であることを受け入れていたのだと思います。

ですからヨセフは、「同僚の決議や行動には同意しなかった」と書かれています。

つまり、イエスさまを、神を冒瀆した罪で死刑にするという決議や、ピラトのもとに連れて行って、ローマ皇帝に逆らう者として十字架につけて欲しいと訴えることには、賛成していなかったのです。

しかし、「同意しなかった」というのは、少し消極的な表現です。反対した、とか、抗議した、とは書かれていません。イエスさまを、彼は正しい方であると思っていた。でも、おそらく多勢に無勢、民衆も十字架につけろと叫ぶ中で、彼は何も出来なかったのです。

ヨセフはきっと、イエスさまの十字架の責任を感じていたと思います。深い悲しみ、嘆きと共に、後悔の気持ちや、大変な無力感をも感じていたのではないのでしょうか。

十字架でイエスさまが死なれた時、ヨセフは、遠くに立って見ていた大勢の中の一人だったに違いありません。

しかし彼は、イエスさまが死なれた今や、勇気を振り絞って、この方のために自分に出来る限りのことをしよう、と思いました。誰に言われたのでもありません。イエスさまのために何かをしたいと望んだ。せずにはおれなかったのかも知れません。

<安息日の前に>

そして、52節にはこうあります。「この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出て、遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた」。

ヨセフは、イエスさまを葬るために、急いでピラトの許可を得なければなりませんでした。

なぜなら、イエスさまが十字架で死なれたのは、先週読んだ箇所によると、午後三時ごろであり、あと数時間で日没になるという時間だったからです。

ユダヤ人における一日は、日没から始まります。わたしたちで言う金曜日の午後三時にイエスさまが死なれたとすると、もうあと数時間で日没となってその日が終わり、次の日の土曜日がやってくるのです。

ユダヤ人にとって土曜日は安息日です。安息日になれば、葬りの業はもちろん、あらゆる仕事を休まなければなりません。54節にも「その日は準備の日であり、安息日が始まるうとしていた」とあります。この安息日が始まるまでの数時間で、ヨセフは葬りの業をすべて済ませる必要があったのです。

それに、もう一つ、今日の旧約聖書に読まれた申命記の箇所も理由の一つです。

申命記 21：22～23 にはこうありました。「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけらば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた者は、神に呪われたものだからである。あなたは、あなたの神、主が嗣業として与えられる土地を汚してはならない」。

処刑され、木にかけられた者は、神に呪われたものとされていました。そして、死体を必ずその日のうちに埋めねばならない、と律法で定められていたのです。

また本来、処刑された者は、手厚く葬られることは許されず、ほとんどが共同墓地に捨てられていたようです。ヨセフはそのようなことを、イエスさまに対して、決してさせたくないと思ったのでしょう。

それで、ヨセフはまずピラトのもとに行きました。イエスさまの遺体を引き取ることを申し出るためです。それはおそらく、大変勇気のいることだったでしょう。マルコによる福音書には、はっきりと「勇気を出してピラトのところへ行」った、と書かれています。

でもピラトはすぐに、ヨセフがイエスさまの遺体を引き渡してくれました。

通常は、ローマ帝国側も、処刑した者の遺体を家族や知人に渡すことはなかったようです。しかしピラトは、自分もイエスさまには罪がないと思っていましたし、ここはユダヤ人の地域ですから、ユダヤ人の中でも地位が高い議員のヨセフであれば信頼できるし、協力した方が何かと都合が良いと考えたのでしょう。

そして、何よりヨセフにとって勇気がいったのは、今後、人々はもちろん、議員仲間との信頼関係や、議員の立場そのものさえ失う可能性があった、ということではないでしょうか。

しかもこの期間は、ユダヤ人の最も大切なお祭りの一つである、過越祭の最中でした。その期間に、ヨセフは神に呪われた遺体を引き取って、触れて、自分の墓に入れるわけですから、当然これ以降、一定の期間、ヨセフは汚れた者となり、過越祭の祝いの席に加わる事が出来なくなるのです。

しかし、善良な正しい人、神さまとの関係を重んじる人であったヨセフは、人の目を気にしたり、人にどう思われるかよりも、神さまの御前で、自分がなすべきことをしようと思いました。神さまの御心を求める人だったのです。自分の立場や評判を考えるよりも。自分が汚れるということよりも。死刑の時に、イエスさまに対して何も出来なかった自分が、今ここで出来ることがあるならば、それを喜んでしたいと思いました。

そうしてヨセフは、イエスさまの遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めました。

この墓は、新しい墓でした。おそらくヨセフが、自分が死ぬ時のために準備していたものでしょう。しかし、彼はこの墓を、イエスさまのためにささげたのです。

…このようにして、ヨセフがイエスさまを墓に葬る様子を、ガリラヤからイエスさまに従

ってきた婦人たちが、すべて見届けていました。彼女たちは、イエスさまが、確かに死んで、葬られた、ということの確かな証人です。そして、この婦人たちも、イエスさまを思いながら、心を寄せながら、何も出来なかった人々です。

しかし、彼女たちもまた、おそらく深い悲しみと、自分の無力さを覚えながら、自分たちに出来る限りのことをしようとしていました。ヨセフは葬りを急いでいたために、本来は十分に香料と香油を遺体に塗るのですが、それをする暇がなかったようです。

婦人たちは、せめて安息日が明けてからでも、改めて丁寧な葬りをしようと、イエスさまのために香料と香油を準備することにしました。

このようにして、金曜日は終わっていきました。イエスさまは、お昼の十二時に十字架に架けられ、午後三時ごろに死なれ、日没までにはお墓の中に葬られました。

イエスさまは確かに死に、確かに墓に葬られました。まことの人となられたイエスさまは、わたしたち人間とまったく同じように、死んで、葬られたのです。

<墓の中の安息日>

そうして、日没となり、安息日がはじまりました。56 節の後半に、このように語られています。「婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ」。

実は、「安息日」の婦人たちの様子を語っているのは、このルカによる福音書のみです。

今日の聖書は、56 節の変なところに小見出しが入っていると思われたかも知れませんが、おそらくこれは、死んで葬られた日と、安息日の区切りを示したかったのだと思われます。

さて、この安息日、土曜日は、イエスさまがずっと墓の中に横たわっておられた一日です。

そして、アリマタヤのヨセフも、葬りを見届けた婦人たちも、そして一切ここでは姿を表さなかった弟子たちも、そして近くから、遠くから十字架を見つめていた人々も。みな、この安息日は、イエスさまの十字架の出来事を深く思い巡らせて一日を過ごしたのではないのでしょうか。

「婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ」。ここでは特に婦人たちにスポットライトが当たります。なぜなら、この死と葬りの証言者である婦人たちが、この後に起こる出来事を目撃する者となるからです。彼女たちはまだ知る由もありませんが、この悲しみと嘆きに満ちた安息日は、その次の出来事に向けての、備えの日に他なりませんでした。

しかし、とにかくこの安息日には、婦人たちをはじめ、多くの人々が、深い悲しみと、嘆きと、後悔と、心の痛みの中で、十字架のイエスさまのことを思って、過ごしたに違いありません。思わずにはいられなかったに違いありません。

イエスさまは、なぜ死なれたのか。なぜ神に呪われたものとして死なれたのか。

そして、心に残る出来事もありました。なぜ全地は暗くなったのか。なぜ神殿の垂れ幕は避けたのか。なぜイエスさまは「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」と、大声で叫ばれたのか。

わたしたちもまた、イエスさまの葬りの後の一日を思うとき、この出来事に留まって、イエスさまの十字架によって何がなしとげられたのか、イエスさまはなぜ苦しんで死なれたのか、なぜ死者の墓の中に置かれたのか、そのことをしっかり見つめなければなりません。

十字架の金曜日と、復活の日曜日との間に、この墓の中の土曜日があるということ。ルカはまさに、そこにわたしたちの目を向けさせようとしているのかも知れません。

<死んで葬られ、陰府にくだり>

そしてこのことは、わたしたちが毎週告白している「使徒信条」の中にも、よく表されています。使徒信条では、「十字架にかかり、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがへり」と告白されています。「死にて葬られ」の後、そして、「三日目に死人のうちよりよみがへり」の前に、「陰府にくだり」という一文が語られているのです。

これは、どこかに「陰府」という場所があって、そこに死んだイエスさまが行かれた、という意味ではありません。キリスト教の教派によっては、そのような解釈をするところも確かにあります。しかし、わたしたちの教会が受け継いでいる「改革派」の伝統においては、「陰府にくだり」は、イエスさまの徹底した「へりくだり」のことであると理解しています。

イエスさまが受けられた苦しみと十字架の死は、わたしたちの罪を担われたために受けられたものでした。イエスさまは、罪のないお方であったのに、わたしたちの罪を代わりに背負って下さったために、肉体の耐え難い激しい苦痛のみならず、心も、魂も、そのイエスさまの存在のすべてにおいて、これ以上ない不安と苦痛と恐れを耐え忍ばれたのです。

そのゆえに、わたしたちはもはやそれらを経験することは免れる者となりました。罪に対して下される、神の怒り、神の裁き。その恐れ、苦しみ、滅びの死。このどん底の、最も激しい苦しみを、イエスさまただ一人が、その身に負って下さったからです。

使徒信条はそのことを、「陰府にくだり」という言葉で言い表しています。

「陰府」とは、命から離れたところを意味します。つまり、命の造り主である神さまから離れること、神さまの御手から切り離されている状態、と理解できます。

神さまから離れること。神さまに手を離されること。神さまに見捨てられること。これは、神さまに造られ、神さまに命を与えられた人間にとって、誰も耐えることの出来ない、まことの絶望であり、まことの死であり、まことの滅びなのです。

それなのにわたしたちは、罪によって、自ら神さまの御許から離れてしまいました。神さまを自分の神と認めず、頼らず、信じず、裏切り、捨て去り、認めませんでした。

わたしたちは、この罪のために、神さまに裁かれ、滅びるべき者だったのです。神さまに見捨てられてもおかしくない者だったのです。

しかし、神の御子イエスさまが、このわたしたちの罪を担われました。

他の福音書においては、イエスさまは十字架上で最後に、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」との絶望と恐怖の言葉を叫ばれたことが記されています。

それは、まさにわたしたちにとって、最も恐ろしい、最も苦痛で、最も絶望的なところに、イエスさまがその身を置かれた、ということなのです。

わたしたちの罪を引き受けて下さったイエスさまは、わたしたちの代わりに神の裁きを受け、神に見捨てられた者となり、わたしたち罪人の誰よりも深く、苦しみと絶望の底にくだり、最も激しい苦痛を耐え忍び、そこでわたしたちを下から担って下さったのです。

これが、十字架の苦しみを受け、死んで墓に葬られた、神の御子の徹底的なへりくだりであり、「陰府にくだり」が意味することです。

そしてこのことは、2000年前に起こった十字架の出来事の意味はこうでした、というだけではありません。

イエスさまがあらゆる苦難をお受けになったということは、今を生きるわたしたちが経験するような、あらゆる悩み苦しみを、この方がすべてご存知でいて下さるということです。

痛みも、悩みも、絶望も、死への恐れも、死そのものも、葬りも、すべてを、この神の御子イエスさまがご存知であるということ。そして、そのすべてにおいて、このわたしと共にいて下さり、すべてにおいて、このわたしを担って下さっているということです。

わたしたちはもはや、神さまから見捨てられることは決してありません。そのように叫ぶ必要はありません。なぜなら、この神の御子イエスさま自らが、その絶望の果てにまで来られたからです。罪人が神に見捨てられるその絶望さえも担って下さったからです。陰府にまでくだって下さったからです。

これは、今を生きるわたしたちの、慰めであり、支えであり、希望となる事柄です。

イエスさまが墓の中に置かれた土曜日。沈黙の安息日。死にて葬られ、陰府にくだられたイエスさま。このことによって与えられる恵みを、わたしたちは深く心に留めたいのです。

<よみがえりの場所>

そして、これらのことは、次の日の、復活の出来事への備えとなります。

十字架のイエスさまを見つめていたわたしたちの目は、死者の中から復活なされたイエスさまを目撃することになるのです。

天の父なる神さまは、すべての人の罪の贖いを成し遂げられたイエスさまを、死者の中からよみがえらせられます。そうして、まことにわたしたちの罪が、イエスさまによって赦されたことを宣言し、わたしたちが、もはや滅びの死に引き渡されず、死に勝利なされたイエスさまの御手にしっかりと捕らえられて、命を得る者となることを、明らかにして下さるのです。

イエスさまを葬った墓は、主のよみがえりを告げる場所となります。

死が支配していたと思われた場所は、イエスさまの命の支配に覆われます。

この墓の持ち主であるヨセフは、これ以降は登場しません。しかし、このイエスさまのよみがえりを知った時、復活のイエスさまと出会った時、いったいどれほどの驚きと、喜びに満たされたことでしょうか。

ある人は想像しました。やがて、ヨセフが死を迎える時、彼はイエスさまがよみがえられたその墓に、自分も入ることにしたのだろうか。もしくは恐れ多いと考えて、他の場所を用意したのだろうか。

しかしどちらにせよ、もはやヨセフにとって、墓とは、ただ死者を安置する場所ではありません。悲しみと嘆きの場所ではありません。

墓は、十字架で死なれたイエスさまが、復活なさった場所。死への勝利がなしとげられた場所。神さまのご栄光が満ち溢れた場所となったのです。

そしてそれは、今、イエスさまの復活を知らされている、わたしたちにとっても同じです。

お墓は、わたしたちにとっても、もはや死者の体を納めるだけの場所ではなく、同時にイエスさまの復活を見つめるところ。そして、わたしたちの復活の希望と約束を仰ぎ見るところとなったのです。

十字架にかかり、死んで葬られ、陰府にくだられたイエスさまが、墓の中からよみがえられた。それは、わたしたちのためだったからです。

ですから、イエスさまの救いを信じ、イエスさまの御跡に従っていく者は、たとえ苦しみを通る時も、悲しみを通る時も、やがて死の中を通る時でさえも。どのような時もイエスさまが共にいて下さり、わたしを担い、守り、導いて下さることを信じる事が出来ます。

そしてやがて、イエスさまが先立って行き、拓いて下さった、復活と永遠の命への道を、わたしたちもまた、イエスさまの後に従って、進んで行く事が出来るのです。

【お祈り】 天の父なる神さま

わたしたちの罪を赦し、滅びの死から救い出すために、あなたの愛する御子イエスさまがこの世に遣わされ、十字架でわたしたちの呪いを一身に引き受けて死に、お墓に葬られました。すべての罪と、あらゆる絶望と、滅びを、わたしたちの誰よりも深くくだられて、すべて担って下さいました。

この方であって、わたしたちがいつも神と共にいる者とされたこと。わたしたちのどのような悩み苦しきも、御子イエスさまが担って下さり、慰め、癒し、解放して下さいました。そして、この方のよみがえりが、わたしたちのための死への勝利であり、わたしたちのための復活の約束であることを、心から感謝いたします。

イエスさまのへりくだりを、深く心に覚える事が出来ますように。

救い主イエスさまの御名によって祈ります。アーメン